

# 三善 アクセントとは

加藤 良一

2023年7月10日

千原英喜さんの男声合唱とピアノのための組曲『みやこわすれ』の中の第1曲「薔薇のかおりの夕ぐれ」は短い曲ですが、数カ所に「三善アクセント」と呼ばれる1音に「<>」のアクセント記号が付いています。これをどう演奏するかについてはさまざまな考え方があるようです。

男声合唱とピアノのための組曲

## みやこわすれ

### 1. 薔薇のかおりの夕ぐれ

野呂 昶 詩  
千原英喜 曲

Allegretto delicatissimo ♩=ca.112

Tenor 1 *mp*

Tenor 2 *mp*

Baritone *p*

Bass *p*

Piano *mp dolce e legato* *mf*

薔 薇 の か お り

[三善晃の創作における歌曲作品の位置付けと研究上の諸問題] (『音楽研究』第1号 2022 平川綾菜)において、下記のように触れています。

通常のアクセントと同じく「強調」の意であると考えられる。しかし、音が持続する楽器の1音のみにつけられたのであれば、その1音に細かい強弱を入れる奏法も否定はできない。しかし、現在、この記号の定義や用法、また演奏者側のとらえ方については明確になっていない。少なくとも、三善がどういった意図をもってその記号を使用し、期待した演奏法とその効果がどういったものであるかについて、三善の生前に交流のあった演奏家らへのインタビューが必要だろう。

要は、記号だけではわからず、本意をよく聞く必要があるということでしょうか。また、「音が持続する楽器の1音のみにつけられたのであれば、その1音に細かい強弱を入れる奏法」であるとしている点では、大方の認識と同じだと思います。

では、具体的にどうするか、さまざまなことが言われていて、実践するにはわかりにくいものです。分かりやすく解説するとどうなるのでしょうか。

そこでfacebookで公開質問してみたところ、専門家や一般の方々から以下のような反応がありました。

Aさん：これが完成すると正しく認識できるようになると思います。

<https://camp-fire.jp/projects/view/648129>

世界に誇る作曲家三善晃作品の指揮者 栗山文昭氏の解釈を後世に残す プロジェクト

筆者： ご案内ありがとうございます。素晴らしいプロジェクトですね。三善作品は私にはなかなか手が届きにくい位置にあるような気がしますが、すこしでも神髄に近づきたいです。

Bさん： 三善先生の三つの抒情の中に入っていますが東混の田中先生の演奏はカチンとしたアクセントで演奏されてますが、松下耕さんの指揮した三つの抒情はそのままにとらえてなく、わりとさらっと演奏しています。信長さんの作品にもその記号が出てきますが、私が指揮した合唱団ではその時(その曲想)によってカチンとアクセント的に処理したり、深く暖かい感じで演奏したりしてました。私の考えですが、その曲によっていろいろな解釈があつていいとおもうのですが。

筆者： 表現の仕方は指揮者、奏者によって様々ですね。シンプルな「<>」ひとつでどれだけのことが伝えられるか、曲想にもよりますし、いろいろあつて当然ですね。

Cさん： 単純に立ち上がりの悪い柔らかめのアクセントと捉え演奏しております。抽象的で申し訳ありませんが「ぶわ～、ドゥウン」風？ 千原英喜先輩にお電話してお聞きしたところ「それで、そのつもりで」だそうです。

筆者： 「ぶわ～、ドゥウン」(^\_-)

Dさん： 今、私が指揮している合唱団で千原さんのみやこわすれ(混声)を定期演奏会に向けて練習していますが、あの曲はCさんのおっしゃる通りだと思います。しかし三つの抒情の二曲目北の海はどうでしょうか？ 私はカチンとしたむしろアクセント気味がいいと思ってます。ですから、この記号がきたときは、必ずこうしなければいけないと決めつけられないほうが良いのではないのでしょうか。やはり曲想を理解してそれにあつた解釈をするのがベターだとおもうのですが。

筆者： 曲想によるということは十分に理解できます。いろいろあつて当たり前ですね。

Eさん： 信長貴富先生の「春」をやったときに、三善先生の発想とは違うのかな、と感じ、少し戸惑いました。どちらにしても、その音単体に対するアクセントというよりも、周りの音とのつながりの中で、そこに「アクセント(強調)」がある、というようなものと私は捉えています。ですが、アクセントが書かれてな

くても、アクセントになるよなーと感じることも多いです。なので、周りの音との関係の中で、アクセントの表現の仕方は変わると思います。

筆者：「その音単体に対するアクセントというよりも、周りの音とのつながりの中で、そこに「アクセント(強調)」がある」というご意見は他の方とも共通しているようです。

Fさん：三善晃先生が朗読するとちゃんと三善アクセントも普通のアクセントも、テヌートもよく分かりました。三善アクセントも普通のアクセントもテヌートもすべて強調するという意味でのアクセントだが、三善アクセントはアルシスであり、テヌートはテーシスだなんて思っている。

Gさん：アルシスとテーシスについて、グレゴリオ聖歌の時代に普通に共通理解できていたことが古ネウマ譜から離れて行くにつれて、物理的に測りやすい表し方になっていったのでしょうか？日本の伝統芸能や声明の中に見られる微妙な動きと三善アクセントの間に何か関連があるような気がしております。

筆者：三善アクセントはアルシスなんですか！以前聞いたのは、アルシスは風呂敷を広げるときに上にフワッと持ち上げること、それがゆっくり下りてくるのがテーシスで、なるほどと思いました。三善アクセントも初めからドン「<」とアクセントが付くのではないということですね。

Hさん：同じマーク、実はベートーヴェンも書いています。ピアノ曲で1音の上にも。

筆者：そうなんですね。そもそもは古典派やロマン派の音楽で使われ始めたといえますから…。ただ三善アクセントとまで特別に扱われるほど多用するようになったのはごく最近のことなんだろうかな。

Iさん：日本のピアノ弾きには「ブラームスアクセント」と呼ぶ人もいますね。究極的には音量だけの問題ではなく、音(言葉)の置き方やテンポ揺らしまで含んだ概念なんだろうなと思います。

筆者：ピアノのことは分かりませんが、「ブラームスアクセント」ということは、ブラームスに特徴的なアクセントなんですね。



Iさん：自分自身、編曲や三善パロディでも多用していますが、とげとげしくなって欲しくないアクセントにつけているような気がします。(次頁楽譜参照)

筆者：前にGさんがおっしゃっていたアルシスのような感じですかね。

Iさん：そうですね。ふわっと上がる感じで、と考えています。

25  
S *mf* ね B.O. ルルルルル ル ラーラララ  
A *mf* ね B.O. ル ラルーラル ル ラーラル  
T *f* ね しろい はなのみちへ *mf* ル ラーラララ  
B *f* ね しろい はなのみちー *mf* ルンルン ルン ルン ルンルン ルン ルン

30  
S *ff* かぜの ふる さと *dim.* ルラ ルラ ルラ  
A *ff* かぜの ふる さと *espress.* *dim.* B.O. つれて  
T *mf* ル *espress.* B.O. *dim.* ルン ルン ル  
B *ff* かぜの ふる さと *dim.* ふる さと B.O. ルン ルン ル

35  
S *mf* ーララ ラララ ララララ ララララ ルラ ルラ ルルルル  
A ゆく のね つれて ゆく の  
T *mf* ルン ルラララ ラララ ララララ ルン ルン ルン ルル  
B *mf* ーララ ラララ ララララ ララララ ルラ ルラ ルルルル  
ルン ルン ル ルルル ルン ルン ルン ルルル

Jさん： 三善晃先生がご生前、東京カンタータで公開練習に先生ご自身が客席からアドバイスを送っているところを後ろから拝見したことがあります。20年以上前のことなので記憶が曖昧ですが、演奏者の思いを入れて大事に唄うという主旨を話されていたように思います。余談ですが演奏中、三善先生はというと、ずっと目を閉じてなにやら宇宙と交信しているような格好をされていました。

結果的にその団体の演奏はややもたれるような表現に聴こえましたが、単にテンポがゆっくり遅れていくのではなく、演奏者が表現する意図をもって、「世界」を聴衆と共有することを到達点とされているように、僭越ですが感じる事ができた記憶があります。

グリー在籍中に藤井宏樹先生に「遊星ひとつ」を指揮して頂きましたが、藤井先生はあまり細かく指示はされず、指揮で僕らの気持ちを煽るような動きをされて、その場の雰囲気的大事にされているように感じました。その後、ある曲の解説でjazzの影響があるのでは、というお名前を失念しましたが、ある方の解説を拝見して妙に納得したことも思い出しました。

筆者：「演奏者の思いを入れて大事に唄う」これですかね！

Kさん： すごく雑で申し訳ないのですが、三善アクセントは、その個所を「ぼわっ！」という感じで声を出しつつ、そこに感情を乗せると、指揮の先生からは「それやめて」という反応はなかったように思うので、そんな感じに歌えばいいのかと思っていました。演奏の立場の感覚的です(三善アクセントも「ぼわっ！」という感じですよ)。

筆者：「ぼわっ！」ですか、なるほどそんな感覚もあるんですね。

これといって結論めいたことは出てこないようですが、いずれにしても1音に「<>」とアクセントを付けるのは、それなりの思いや願いがあるわけです。それを奏者がどう受け取り表現するか、曲想に合わせたアクセントをどう解決するか。ひと言でこれだという定義は見当たりません。

---



Back

音楽・合唱コーナーTOP^



Home

HOME PAGE^